

1. 「環境」 environment とは? 「自然環境」「精神環境」「社会環境」を全体論的に捉える視座
2. 環境倫理を考える三つの要素 「環境持続性」「社会的公正」「存在の豊かさ」
3. 環境思想の歴史的展開における思想的転換——21世紀の課題は「不確実性を前提にしたマネジメント」
4. 「恵み」も「禍い」も統合的に捉えた環境倫理——「包括的ウェルネス」の思想

「安心」と「恵み」の構造が変わってきた? = 「自然資源の確保」と「自然保護」は矛盾するのか?

自然資源の確保は時として自然保護=生物多様性の保全と矛盾していた。従来は、自然の「恵み」は、経済的に評価可能なものに特化して捉えられてきた。しかし、生物多様性の保全は、本来は! 「畏敬」や「自然リスク回避」、「精神的豊かさ」も含めた「恵み」が含まれる。自然保護の目的は、「畏敬」や「自然リスク回避」「精神的豊かさ」の「恵み」を確保することである。自然の「恵み」を広く、全体的なものとして捉えると、自然資源の確保と自然保護は矛盾しない。自然の恩恵と災害リスクの均衡。「災害-安心」と「恵み-豊かさ」を組み換えた人間と自然のあり方が問われている。「恵み-豊かさ」を享受するためにも、ある程度のリスクを甘受する必要。どのようなリスクが受け入れ可能かを、選択していく必要。その意味で、住民の参加が必要。積極的に、河川を自分たちのものとして、リスクも含めて管理していくための「主体」が形成される必要性がある。「恵み」は広域の人たち、「禍い」は地域住民、の非対称性。「恵み」は、生業・経済的、河川環境、水とのかかわり。「禍い」は、水をかぶること。「恵み」と「禍い」を一体とした形で捉えられる「主体」が形成される必要性。「ローカル知」の重要性——津波の「記憶」の伝承、地域文化の重要性。「田老の防潮堤=〈万里の長城〉」の問うもの。「津波てんでんこ」の意味をどう捉えるのか?

5. ローカル知の構造と特質

地域性 (空間的集積) = 〈地域〉に独特な形で形成されてきた潜在的な知。住民 (地域に生きる人々) の中に〈間主観的〉に存在する。歴史性 (時間的集積) = 〈歴史的に蓄積〉されてきた文化や風土に根ざした知。非専門知 (集合的集積) = 普遍性を標榜する「科学知 (専門知)」と対極的に存在する知。暗黙知。〈暗黙知〉的な形で存在するが、一方で、〈身体〉的でもある知。★「自然とのふれあい調査」の実践

奥州街道・浜街道と津波浸水域。(東北大学平川新)。869年(貞観11年)の地震と大津波。1611年(慶長16年)の地震と大津波。奥州街道(国道4号)と、浜街道(国道6号)。

6. 自然の徹底的管理を前提とした20世紀型科学技術の終焉

近代以後、人間は近代科学技術の恩恵を受け、徹底的に自然を管理することを前提にした自然とのかかわりのあり方が形成された。個々の人間と自然との関係は希薄で部分的。人は自然の中で驚くほど無能力になってしまった。昨今の、今まで考えられなかったような自然災害を前に、人は何もすることができず立ち尽くしている。★「異界」(管理できない自然)を無くしたことの問題⇒不確実性を前提とした自然とのつきあい方の新しい時代が到来! 自然の「他者性」の再考。☆災害に対する安全性と環境保護、特に、東日本大震災の未曾有の災害を前にした時の環境倫理のあり方。

7. 情報の不確実性のもとでのマネジメントの時代における 新しい技術と、新しい倫理の必要

17世紀からの人間の自然の支配のイデオロギーは、20世紀に完成を迎えて、その不可能性が明らかになった。《完全性(普遍法則性)を目指して自然をコントロールする》というプログラムから、《不完全性を前提に、不確実な情報の中で、自然にかかわる問題をマネジメントとしていくべきである》という新しいパラダイムが生まれた。近代の自然を徹底的に管理するパラダイムの終焉。⇒不確実性を前提とした自然とのつきあい方の新しい時代が到来! 不確実な自然を対象としたありうべき「技術」のあり方はどのようなものか。自然を受忍する技術と自然を支配する技術。生物のネットワーク、文化のネットワーク、人間のネットワーク。ネットワークの「つながり」を保持する技術。「つながり」を切断する技術。生物のネットワーク(生態系)、人間の文化のネットワーク(歴史・文化)、人間の社会のネットワーク(共同性・合意形成)。

★《完全性(普遍法則性)を目指して自然をコントロールする》というプログラムから、《不完全性を前提に、不確実な情報の中で、自然にかかわる問題をマネジメントしていくべきである》という新しいパラダイムが生まれた。21世紀は、不確実性の時代であり、マネジメントの時代である。科学的には、順応的管理という思想、リスクマネジメントと予防原則という思想が象徴的。その中で、ローカル知への注目という問題を提起。

★新しい技術の特質を問う。(1) 普遍性を目指すのではなく、地域性に重点が置かれる——多元的な技術【生活知の空間的集積】(2) 地域社会の歴史性、文化性を考慮する——歴史・文化文脈的な技術【生活知の時間的集積】(3) 地域社会の、社会のあり方、合意形成のあり方を考慮する——参加型の技術【生活知の集積】(4) 完全性を目指すのではなく、不完全性に意味を見いだす——開かれた技術(openness)

8. 3.11 以後の新しい価値観の転換

コミュニティの「力」が災害時に大きな役割。人々の助け合い、「絆」の再認識。「競争」より「相互扶助」を基礎にする社会のあり方。弱者救済も社会の中に折り込んだ社会的公正に基づく社会。災害、不確実性を「受容」し、「凌ぐ」という古く新しい理念。近代科学技術の限界と伝統的な文化や技術の復権。社会的関係性、精神的価値の復権。自然環境だけでなく、精神的環境、社会的環境の重要性。

9. 多義性、多義的枠組みの重要性

多義的な枠組みとは、一つのこと(技術や制度)が、一つの主要な機能(単機能)を持つだけでなく、より多くの機能(多機能)を持つことにより(多機能化)、さまざまな社会的な関係性の中で、より深い意義を持つようになり、さまざまな社会的ネットワークによって支えられるようになる、そのような枠組みのこと。多義的な枠組みの再構築と、不確実性を生きる社会。

★「交通システム」の多機能と単機能——「多義性」。交通・輸送は、かつては、単にモノや人を移動させるだけのことでない、より包括的な社会的な意味を持っていた。「道」は、単にモノや人の移動の媒体ということにとどまらず、人間の生活にとって精神的にも社会的にも深い意味があった。しかし、近代産業社会の進行の中で、高度成長期を通じて、いかに効率よく移動させるかということに単機能的に特化した形で技術は進歩してきた。しかし、21世紀になって、環境的なサステナビリティの実現が大きく求められ、高度成熟社会において、「縮小」を機軸に社会を組み直していかなければならない時代を迎えて、交通・輸送ということが持つ意味はより広く、多義的なものになってきた。そもそも、交通システムとは？ 人やものを運ぶもの、その手段、媒体、社会システム。鉄道、自動車、飛行機、道、駅、空港、規則、法律。近代産業社会では、いかに速く、効率よく、運ぶことに特化して発展してきた。しかし…… ゆっくり運ぶことにも意味がある。「街道」では人が行き交い、出会い、文化が交流し、そこに交換、取引が成立する。「移動」は手段でもあり、また、目的でもある。巡礼、旅行。その多義的な交通システムは今後どうあるべきなのか？

★オンデマンド交通における多義的枠組み。交通・移動という「単機能」から「医療」「福祉」「購買」「交流」「農業体験支援」等々の「多機能」を担い、多機能化することにより、新たなコミュニティを創造し、コミュニティを組換える。ICT技術等の社会的方向付けにより、最適化のあり方等、科学技術の枠組みを変え、従来の効率性など、近代の産業社会の論理から切り捨てられてきた、伝統技術や精神性、社会的公正、技術の多義的枠組みなどを蘇らせ可能にする、新しい社会的原理を創造する社会技術の可能性。

10. 分散型社会を基調とした地域づくり

集権的電力供給システム社会から分散型電力システム社会へ。単機能社会から多機能社会へ——多義性の重要性(分散型システムだから可能)。三つのネットワーク(生物・生態系 / 歴史・文化 / 地域住民の関与)を保持する技術と社会。自然の恵みと禍をトータルに捉えた包括的な福利を目指す社会。地域・住民の多様性に対応した多元性のある技術と社会。地域の歴史・文化に根ざし、活用した技術と社会。地域住民が関与し、参加できる技術/開かれた技術。自然環境・精神環境・社会環境をトータルに捉えた社会。経済的リンクと精神的リンクの統合・全体性(ホーリスティックなあり方)を保持する社会。